

上新電機オーディオ試聴会 (2016.10.9)

—マランツ SA-10—

1. はじめに

上新電機日本橋 1 番館で開催されたマランツの新製品 SA-10 の試聴会に行ってきました。SA-10 はオリジナルディスクリット DAC 「Marantz Musical Mastering」を使用した意欲作ということと、マランツの SA11-S1 を使用していたことや SA11-S2 を現在も所有していることもあって、どのような改善点があるのか、興味を持って参加しました。

2. 使用機器

SACD : マランツ SA-10



プリメインアンプ : マランツ PM11S3



スピーカー : B&W804D3/MR

SA-10 のプレスリリース資料によれば、次のような特徴があります。

「SA-10 は、マランツオリジナルのディスクリット D/A コンバーターを搭載。一般的な IC チップによる DAC を用いずに、すべての処理をオリジナルのアルゴリズムおよび回路で行うことにより、理想的なサウンドを実現することができました。また、最新世代のオリジナル・メカエンジン「SACDM-3」、11.2 MHz DSD 対応 USB-DAC 機能、コンプリート・アイソレーション・システム・デュオ、HDAM®搭載フルバランス・ディファレンシャル・オーディオ回路、ゲイン切替機能付きフルディスクリット・ヘッドホンアンプなど、これからの時代におけるマランツのリファレンスプレーヤーにふさわしい最先端、最上級の仕様を投入しています。」



当日のセッティング

3. 試聴会の進行

最初に SA-10 開発の経緯の紹介があり、位置づけとしては新しいリファレンス機とすることの話がありました。また、フィリップスからの移籍技術者が開発の中核となったことや、ディスクリット構成とすることで、より良いパーツが選択できること、トランスの容量も大きくなったことなどの紹介を織り交ぜながら試聴が進行しました。比較のためにこれまでのリファレンス機である SA11-S13 による再生を織り交ぜながら SA-10 の音質を確認していきました。

最初にボーカル、ついでショスタコーヴィッチの 5 番 4 楽章、Faziloli のピアノ曲などがかかりましたが、確かに SA11-S13 より SA-10 の方が、3 次元的な音場表現、濃密な音の構成、クリーンで静寂感から浮かび上がる音像など、改善効果が確認できました。

ここからは SA-10 単独の再生で、Jazz と女性ボーカル二つがかかりましたが、いかにも優等生的な音で欠点を探すのが難しいような印象です。

さらにこういった試聴会では珍しく、幻想の SACD、マーラーの 3 番、アッカードの演奏によるパガニーニのカンパネラなどがかけられましたが、オケの各パートの分離、個々の楽器の切れ込み感などが確認できました。最後に女性ボーカルと男性、女性取り混ぜてのボーカルがかけられてフリータイムに移りました。

マランツの SACD/CD プレイヤーは SA11-S1 と SA11-S2 を使用してきましたので、マランツの音を残しながら、完成度を高めてきていることがよく分かりました。反面、現在もフィリップスメカの EMT981、EMT982、LHH1000、CD95 も健在でよく聴いていますので、同じマスターのアナログと聴き比べた場合のギャップの小ささという点では、こういったオールドフィリップス機のメリットを感じます。マランツ以外のメーカーの新鋭機も含めて言えることですが、SA-10 のレベルでも、もう一味アナログに近づけてほしいという印象は拭えません。

結論的には、SA-10 は全般的には欠点を見つけられないレベルに達してはいますが、アッカードのパガニーニなんかを聴いているとアナログとは何か違うなという印象

が残ってしまいました。

以上